

福島県立大沼高校

キャリア教育

生徒の進路意識と思考力・
表現力を高めるべく、全校
体制でキャリア教育を推進

変革のステップ

背景と課題

- 体系的な進路指導が不十分であり、生徒に進路意識を醸成することが思うようにできていなかった

実践内容

- 「総合的な学習の時間」の改革 2018年度の1学年から、「総合的な学習の時間」を中心とした「キャリア教育のスタンダード」の構築を推進。活用する教材を統一し、生徒に定期的に振り返りをさせて、その内容を蓄積することに
- カリキュラム・マネジメントの推進 19年度に始める探究学習に向け、全校体制で学校グランドデザインを策定。育成を目指す資質・能力を明確にし、その定着度合いを測るためのルーブリックを作成するとともに、カリキュラム・マネジメントを推進する体制も整えた
- 教科指導の改善 アクティブ・ラーニングの視点による指導改善を推進。公開授業などを通じて、生き生きと学ぶ生徒の姿を全教師に示し、意識改革を行った

成果と展望

- 目的意識を持って学ぶ生徒が増え、基礎学力が向上
- 教師間で共通認識が図られ、連携が強化された

PROFILE



旧制・大沼実業補習学校として開校。校訓に「誠実・明朗・健康」を掲げる。コミュニケーション能力の育成を土台に、健全な精神の育成、学力向上と進路実現を目指している。2022年度に同県立坂下高校と統合予定。

設立	1921(大正10)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約100人

2018年度進路実績(現役のみ) 私立大は、仙台大、東北福祉大、東北公益文科大、いわき明星大、城西国際大、大東文化大、日本大などに16人が合格。短大、専門学校進学59人。就職38人。

住所 〒969-6262
福島県大沼郡会津美里町字法幢寺北甲3473

電話 0242-54-2151

Web site <https://ohnuma-h.fcs.ed.jp/>

生徒に大きな可能性を感じ、
中堅教師を中心に学校改革に着手

福島県立大沼高校は、4年制大学から専門学校、就職まで、幅広い希望進路を抱く生徒が集まる学校だ。2017年度に赴任した小松山淳先生は、近年は国公立大学への合格者が出ていない状況に課題を感じていたと話す。

「本校は伝統的に学年団主導で進路指導を行ってきたこともあり、学年によって進路指導にばらつきがありました。また、生徒は素直で優しい反面、自信のなさからか、主体性に課題が見られます。しかし、生徒が書いた文章を読んだり、話をしたりする中で、キラリと光るものを感じることが何度もありまし

*1 ベネッセの教材の1つで、生徒一人ひとりの視野を広げ、将来の進路について考えるきっかけを与える教材。

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

た。体系的な指導をすることで、進路意識が向上すれば、生徒は自己実現に意欲的になれるはず。そうならば、国公立大学に挑戦する生徒も増えていくと考えました」

そうした考えと熱意が評価され、18年度、小松山先生は1学年主任となった。渡部孝男教頭は、学校改革への思いをこう語る。

「本校には、目的が不明確なまま入学してくる生徒も少なくありません。その原因の1つは、『学校の色』がないことだと考え、意欲の高い中堅の先生方に改革の先頭に立つてもらい、進路指導を学年団が主導するスタイルから脱却することで、本校の新たな魅力が



教頭
渡部孝男 わたなべ・たかお

教職歴24年。同校に赴任して1年目。「生徒が『成長できた』、中学校の先生方が『送り出してよかった』と感じられる学校にしたい」

教務主任

本田一弘 ほんだ・かずひろ

教職歴25年。同校に赴任して6年目。「生徒のよりよい生き方や人間的な成長を支えられる教師でありたい」

1学年主任

小松山淳 こびやま・あつし

教職歴13年。同校に赴任して2年目。「生徒の未来を大きく変えられるところに教職の醍醐味を感じる」

1学年担任

長谷川美穂 はせがわ・みほ

教職歴13年。同校に赴任して2年目。「多くの経験や人とのかわりを通して、生徒たちが成長できるよう支援したい」

生まれると期待しました」

キャリア教育の指導を体系化し、体験的な学びの場を充実させる

18年度の1学年団では、どんな教師が担当しても、一定の質の取り組みとなることを目指した「キャリア教育のスタンダード」の構築を最重要課題として位置づけた。同校では、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を生徒のキャリア形成の場として活用してきたが、取り組みの内容は学年ごとに異なり、生徒の進路意識の醸成に課題がある学年が少なくなかった。そこで、まずは総合学習の改革に着手した。

「生徒には、高い目標を設定し、その達成を図ってほしいと思っています。そのためには、自分は社会で何をしたいのかを考えさせ、将来への展望を抱かせることが必要です。また、大学入試で多面的・総合的な評価がより重視される中、進路学習や探究学習などの体験的な学びを充実させていけば、生徒の志望理由書やポートフォリオの内容を豊かにできるのではないかと考えました」(小松山先生)

教材は、「進路サポート」(*1)と「表現サポート」(*2)を使用。同教材であれば、生徒に将来像を描かせたり、探究学習や推薦・AO入試に必要な表現力を高めたりすることができるのではないかと考えた。進路サポート付属の「進路探究ワーク」については、文理選択のワークを割愛するなど、生徒のレベルや必要性に合わ

せて課題を精選して取り組ませた。

「指導力の高い教師でなければ活用できない教材では、スタンダードとして定着しません。進路サポートや表現サポートに統一すれば、指導の質を担保することができると考えました。実際、学年団で最小限の打ち合わせを行うだけで取り組ませることができ、指導面で負担を感じることもありませんでした。また、社会への視野が広がれば、生徒は様々なことに挑戦したくなるでしょう。そうした意欲を行動に移していく中では、初対面の人やよく知らない人に対しても、自分のやりたいことを的確に伝える必要が生じます。そこで、進路サポートと表現サポートを併用し、社会への関心と表現力の両方を高めようと考えました」(小松山先生)

生徒に学びを深めさせるため、定期的な振り返りを徹底

総合学習では、ポートフォリオの構築にも力を入れている。具体的には、「Class」(*3)のアンケート機能を活用し、学校行事や進路講演会、学期末の振り返りを行わせることにした。振り返りの内容が単なる事実の羅列にならないよう、アンケート項目を作る際は、「その行事でどういう役割を担ったのか」「どのように成長したのか」など、自己の成長・変容のメタ認知につながるものになるよう工夫した。アンケート機能を使えば学年を超えてフォーマット

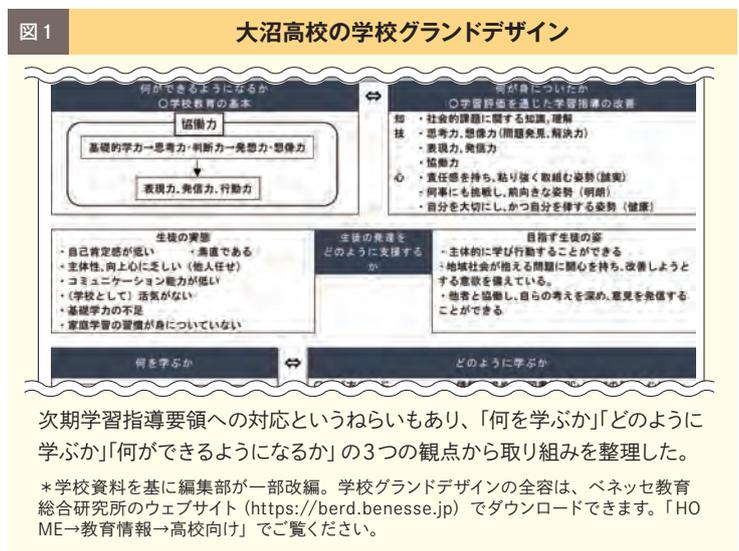
*2 ベネッセの教材の1つ。低学年からの体系的なカリキュラムに沿って、生徒同士の対話的な学びを通して思考力・判断力・表現力を身につけていく教材。
*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

が共有できるため、次の学年団の負担軽減につながるというメリットもある。ポートフォリオの構築は、3年次の志望理由書や自己PR書の作成で必ず生かされると、18年度1学年担任の長谷川美穂先生は話す。

「推薦入試や就職活動に向けた指導で、3年次に3年間を振り返らせても、生徒の多くは『よかった』『大変だった』といった漠然とした言葉でしか語れません。記憶が鮮明なうちにポートフォリオに記入し、自分がその活動でどのようなことを感じ、考え、どんな成長をしたのかを掘り下げておけば、志望理由や自分像が具体的にになり、進路意識も高まると期待しています」

学校グランドデザインを策定し、カリキュラム・マネジメントを推進

19年度には、総合学習での探究学習をさらに充実させることを目指す。その準備として、18年度の後半からは、全校を挙げた2つの取り組みを行った。1つめは、学校グランドデザインの策定だ。渡部教頭と各学年の教師数人から成るワーキンググループを設置し、学校教育目標である「個々の生き抜く力を育み、地域社会を支える人材を育てる学校」を実現するために何をすべきかを議論。次期学習指導要領も踏まえながら、「社会的課題に関する知識・理解」などの7つを生徒への育成を目指す資質・能力として明示し、その達成に必要な取り組みを体系



化した(図1)。ワーキンググループのメンバーである教務主任の本田一弘先生は、こう述べる。「本校では、少子化の影響によるクラス減が続いており、22年度には近隣校との統合を予定しています。そうした中、目指す生徒像にうたわれた『地域社会を支える人材』の育成を切実な課題として捉える先生方が増えていきました。学校が一丸となるためにはグランドデザインが必要だという認識も、多くの先生が持っていたと思います」

2つめは、学校グランドデザインに基づくルーブリックの作成だ。渡部教頭が委員長を務

め、小松山先生や長谷川先生、本田先生、進路指導部長、各教科団の代表者らが所属する新たな分掌「カリキュラム・マネジメント委員会」を設置し、全校で取り組む体制を整えた。

19年1月の職員会議では、同委員会の提案により、ルーブリックの素案を議論した。教師が7つのグループに分かれ、学校グランドデザインに示された7つの資質・能力を1つずつ担当。各資質・能力について5段階の評価規準案を作成した。会議後、同委員会がその案を修正し、ルーブリックを完成させた(図2)。19年度から、主に探究学習において活用していく予定だ。

「ルーブリックの作成にすべての教師がかかることにより、探究学習の実行段階で自信を持ってルーブリックを活用できると考えました。実際、素案作成のプロセスを通して、本校の生徒のあるべき姿を深く考えるようになったという先生もいました」(渡部教頭)

探究学習の内容と流れも固まりつつある。具体的には、まず1年次に、課題設定や調査・分析の方法などの探究スキルの基礎を習得させる。そして、2年次からは、地元の会津美里町役場を始めとした公共団体の協力を得て、地域の課題を学び、具体的な方策を探究する「美里学」(仮称)を展開することを計画している。

国語科を起点として、生徒の考えを深めさせる授業を目指す

アクティブ・ラーニング(以下、AL)の視

図2

大沼高校のルーブリック

目指す姿		レベル1	レベル2
	目的とする過程	集団の一員としての役割を持つ	社会の中で責任を自ら果たす
	知	1,2年のうちに身につけておきたいレベル	基礎
1	社会的課題に関する知識、理解	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	家庭やクラス内などの目的地域社会が抱える課題についての知識を得る。
2	思考力、想像力(問題発見、解決力)	与えられた問題を解決しようとする事ができる。	与えられた問題を分析する。
3	表現力、発信力	自分の気持ちや意見を他者に伝えようとする事ができる。	クラスなどの集団の中で目まとも、意見を述べることが

学校として育成を目指す7つの資質・能力のそれぞれについて、段階的に「目指す姿」を示している。

*学校資料を基に編集部が一部改編。ルーブリックの全文は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

点を重視した指導改善も、キャリア教育と並行して進めてきた。同県の公立高校では、教師の1人をA.L推進委員としている。18年度の同校では、前任校でもA.Lを実践してきた国語科の長谷川先生が委員を務めた。

「生徒の中には、授業にしっかりと臨めている状態とは、教師の話聞き、ノートを取ることだけだと思っている者もいます。そうした生徒の多くは、深く理解せず、暗記に頼った学習をしているためか、定期考査では高得点でも、模擬試験では思うような得点ができないことも少なくありません。生徒がより主体的に学習する授業を行う必要があると考えました。また、推薦・AO入試に必要な表現力や他者と協働できる力を育成したいという

思いもありました」(長谷川先生)

長谷川先生は、生徒の思考を深めたり、協働を促したりできるよう授業を工夫した。例えば、本文の読解を行う際には、文章における着目すべきポイントを示した上で、生徒同士が話し合う場を設定。そして、生徒一人ひとりに考えを発表させながら、授業を展開した。そうした中で、生徒同士の学び合いが活発に行われるようになった。すると、文章から根拠にあたる部分を見つけ、それに基づいて論理的に考えをまとめたり、説得力のある発表をしたりするクラスメートに刺激を受け、自分でもそうした読解・発表ができるよう頑張る生徒が目立つようになったという。

長谷川先生は、A.L推進委員として、教師のA.Lへの関心や理解を深めることにも力を入れた。例えば、自分の授業を公開するとともに、他教科の教師に国語の授業で行うディベートの審査員を依頼したり、インタビュー活動の聞き手役になってもらったりした。そうした中で、講義型の授業とは異なる生徒の生き生きとした姿を目のあたりにしたことにより、生徒の主体性や協働性を重視した授業に力を入れる教師が増えていった。本田先生も、自分の担当する国語の授業を変えた1人だ。

「私は講義型の授業が中心でしたが、正しい読解の仕方を教えるだけの指導に疑問を感じていました。長谷川先生の授業を見て、自分でも文学作品の解釈を生徒に行わせ、出て

きた疑問を発展させるような授業を目指しました。すると、生徒はクラスメートの様々な考えに触れ、思考を深めるようです。論理的に読解できるようになったと感じています」

目的意識を持ち、基礎学力を身につけていく生徒たち

一連の改革の成果は、早くも実を結んでいる。その1つが、基礎学力の向上だ。「基礎力診断テスト」(*4)の結果では、GTZ(*5)の伸び率が50%を超え、Dゾーンの生徒が大幅に減った。

「総合学習で目的意識が醸成されたことにより、学習意欲が芽生えたことが要因の1つだと思えます。課題の提出率も上がっており、日々の生活をきちんとしてようとする意識が、どの生徒にも感じられるようになりました」(長谷川先生)

1学年の取り組みから学校全体の改革へ道筋をつけたことも、大きな成果だ。

「本校では、学校改革に対して多くの先生方の理解と協力が得られました。そうした雰囲気が生まれた背景としては、『このままではいけない』『魅力的な学校にしたい』という思いが多くの教師に共通していたからでしょう。今後は、探究学習を軸に据え、生徒はもちろん、教師自身もワクワクするような取り組みを推進していきたいと考えています」(小松山先生)

*4 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。

*5 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。